

News Letter

ニューズレター

No.
15

2026年3月発行

WEBサイトはこちら▼



お問い合わせ／広島大学大学院 人間社会科学研究科 教職開発専攻 (教職大学院) 広報担当: 又野 陽子
東広島市鏡山1-1-1 TEL:082-424-7170 e-mail:ymatano@hiroshima-u.ac.jp https://kyoshoku.hiroshima-u.ac.jp/

修了生インタビュー 大学院での2年間を語っていただきました

執筆インタビュー

長谷 実加子

教育実践開発コース1年

山崎 真未

教育実践開発コース1年

長谷 ● 修了おめでとうございます。まずは大学院生活で一番印象に残っていることについてお聞きします。

奥 ● 実地研究をする中で、院生室で他の教科の人や自分の専攻している保健体育の人たちと、日付が変わるくらいまで授業を繰り返しているのに時間をかけてやり込んだことかなと思っています。今までそのような経験がなかったです。自分のやりたいことに対してこんなに悩むということがなかったで、良い意味ではないですけど印象に残ることかなと思っています。

長谷 ● そのような大学院生活の中で生じた自身の変化について教えてください。

高尾 ● 教職大学院で学ぶようになったことが一番大きいです。私の研究だと成果物がパンつて出るけどそれだけでは分からない。そこまでのプロセスをしっかりと見ていかないとけない。国語で質的な研究をしているからこそ、正誤やできたできないで見ず、この子はどうかたのだらう、これはどういう意味なのだろうと、過程を見る視点が大切だと思います。

長谷 ● 現場に出るに当たっての意気込みについて教えてください。

水野 ● プロセスを経て生まれてきた結果も、それはそれで大事にしたいけど、上手くいこうが上手くいくまいが、そのプロセスをみながら歩めて楽しめていたのだというかなと思います。現場に戻ったときも先生方と成果を大事にしつつもそこに至る対話をしている時間だったり一緒に何かを作っている時間だったりをお互いが楽しんでいくということを、子どもともやっていけたら、面白い学校になるのではないかなと思います。

長谷 ● 最後に、後輩に伝えたいことについて教えてください。

高尾 ● これほど時間に余裕があつて、授業を一つ長く構想できることはないから、時間を有効に使って、やりたい研究や実践をやり切ることが大事だと思います。

奥 ● 今自分がこの環境にいるということは、悩

む時間がたくさんあるということなので、しっかり悩んで、課題研究報告書を作してほしいなと思います。



修了生と院生のグループ交流の様子

写真左より▶

教育実践開発コース1年
(ストレート院生)
長谷 実加子

教育実践開発コース2年
(ストレート院生)
高尾 彩花

教育実践開発コース2年
(ストレート院生)
奥 芳樹

教育実践開発コース2年
(現職院生)
水野 太就

授業紹介

アメリカの学校で授業を実践

『海外教育実地研究』

担当 松浦 武人先生・木下 博義先生・又野 陽子先生・戸高 真也先生

海外教育実地研究とは、約1週間アメリカに渡航し、現地の学校で見学・授業実践をさせていただく授業科目です。本授業の目的は異文化交流であり、アメリカの子どもたちが日本の文化を体験し、自国の文化と比較したり、創造的な表現活動を楽しんだりします。授業実践以外にも、現地の博物館や文化遺産の見学も行われます。

小学校では、忍者や福笑い、寿司を題材にした授業を行いました。福笑いの授業では、日本文化への理解を深めることをねらいとしました。福笑いの歴史や遊び方をスライドや動画で紹介した後、子どもたちが独自の「目」を制作し、実際に福笑いで遊ぶ活動を行いました。結果として、多くの子どもたちが、福笑いで楽しむ姿が見受けられました。また、福笑いをアメリカの遊び「Pin the Tail on the Donkey」と関連付けて紹介することで、子どもたちの理解を促進することができました。

中学校では、日本文化である土偶やうちわ作り、盆踊りなどの授業が行われました。また、平和の大切さを伝える授業も行いました。その授業においては、佐々木禎子さんの被爆体験を伝えた後、折り鶴で「へいわ」という文字を作りました。アメリカで原爆の話伝えることは不安でしたが、真剣に話を聞いたり、楽しそうに折り鶴を折ったりする生徒の姿を見て、平和を大切にしたい国を超えて共通であることを実感することができました。



小学生に「福笑い」の説明をしている様子



Exploris小学校の前で撮影した集合写真

執筆

新畑 歩佳

(教育実践開発コース1年)

戸崎 夏帆

(教育実践開発コース1年)

中村 知剛

(教育実践開発コース1年)

「小学校体育科授業におけるフィールドノーツ記述をもとにした
学部卒院生のリフレクションについての実践的研究
—「出来事」や「メンター」、「児童」との関わりをきっかけとして—

中村 向陽 (教育実践開発コース2年)

私は、自分のような教員免許取得後すぐの教職大学院生が、学校における実習での少数の授業実践の中でどのように成長していくのかについて、実習中につけた反省ノートの記述をもとに検討を行いました。成長をとらえる概念としては、「リフレクション」という、より良い実践を目指して、認識や教師の教授行為を刷新していくとする理論を参考にしました。結果、少数の実践でも教師の中では確実に変容が起きていることが示唆されました。また、その際、メンターや児童といった自分以外の他者とのかわり、その教師が課題意識を持っている分野(例えば、本研究では、ボールゲームの教材的な知識など)の成長を促すうえで重要な要素として機能していることも明らかになりました。

私が特にお伝えしたいことは、この研究テーマ自体も、学校現場での実習を重ねる中で徐々に形作られていったものだということです。理論と実践を往還する中で、研究テーマそのものが発展していった様相を示せたことが、本研究の最も大きな意義であると思っています。

私の研究

院生の研究内容をご紹介します



「諸子百家の思想を用いた漢文授業の開発」

十川 大夢 (教育実践開発コース2年)

現代の高等学校で行われている漢文教育は、授業時間数の制限や選択科目になった影響によって、生徒が漢文に触れる機会を確保しづらくなっており、また同じ古典探究で実施される古文と比較しても学習環境が整いにくい傾向にあります。そのような状況下だからこそ、漢文を学ぶ意義や目的について改めて検討する必要があるのではないかと考え、私の中でその意義を「古典教材が持つ思想的・文化的価値を深く味わい、自らの経験や社会的課題と関連づけて考察すること」としました。生徒の実体験や社会的課題と結び付けやすい教材として思想教材を取り上げ、「性善・性悪」といったような「人間の本性」をテーマとした随筆を描く活動を行ったり、社会的課題に対してそれぞれの思想家の立場になってその課題を考え意見を共有したりするような活動を授業の中で実践しました。今後も訓読や文法などの知識に留まることのない漢文授業の可能性について自らの学びを深めていきたいと思っています。

ご指導いただいている先生方の教育・研究

「道徳のファンを増やす」

宮里 智恵 先生

みやざと ともえ

大学院人間社会科学部研究科 教授
専門分野：道徳教育、教育課程



宮里先生の研究のきっかけは、26歳で広島大学附属三原小学校に赴任した際、研究専門領域として「道徳」の担当になったことでした。当時は特定の教科の専門を持っていませんでしたが、大学時代から抱いていた「人間はいかにして社会性を身につけるか」という発達心理学への関心が、道徳という領域と見事に合致したそうです。

そこから現在の研究に至るまで、附属校での24年間の実践を通じ「良い授業づくり」を追求し続けてこれました。大きな転機は、恩師ともいえる先生から「誰のために板書をしているのか」と問われ、授業は教師の立てた計画をその通りに実現する場ではなく、「子どものために柔軟に展開する場である」と再認識したことです。この経験から子どもと一緒に授業を作っていく視点を確認し、現在は若い先生があまり苦勞せず楽しく道徳の授業を作れるよう、独自の「道徳科楽々(らくらく)授業づくりシート」の開発やガイドブックの作成に力を注いでおられます。

挫折しそうな時、先生を支える原動力は「三度の飯より授業研究が好き」という情熱と、自身の失敗や葛藤さえも学びに変える姿勢です。「教師自身が楽しい授業でなければ、子どもが授業を楽しむはずがない」という信念のもと、宮里先生はこれからも、教師も子どもも共に生き方を考え続けていく道徳の魅力を現場に広め続けていきます。



講義の様子

執筆

新福 優太

(教育実践開発コース1年)

那須 千夏

(教育実践開発コース1年)

「教育的課題に挑む」

高橋 均 先生

たかはし ひとし

大学院人間社会科学部研究科 講師
専門分野：教育心理学、対人スキル指導



高橋先生の研究のきっかけは、教育的課題を少しでも解決したいという思いからでした。教育的課題は長年にわたり数多く存在する現状があります。こうした課題の中でも、先生は子どもたちの問題行動の解決に向けた研究を大学の学部生の頃から現在に至るまで続けておられます。

先生はこれまで多くの研究に取り組まれていますが、特に力を入れているものとして「アサーション」に関する研究を挙げられました。先生はアサーションを様々な教育的課題を解決する鍵の1つとして考えられ、学会発表や教員研修などといった場でアサーションを伝える活動に取り組まれておられます。学校や学級の実態を踏まえながら、可能な形で「アサーション」が扱われてほしいと願っておられます。

こうした先生の人生における座右の銘として、吉田松陰の「至誠」を挙げられました。この至誠とは真心と表現することもでき、先生の真面目なお人柄を表す言葉とも捉えることができます。先生は歴史がお好きで、山口県にご縁があったことから至誠を大切にしておられるということでした。この座右の銘に導かれながら、高橋先生はこれからも教育的課題に挑んでいかれることでしょう。



講義の様子

執筆

黒田 丈晴

(教育実践開発コース1年)

谷口 晴紀

(教育実践開発コース1年)

「『至誠一貫』をいつまでも」

杉原 満治 先生

すぎはら みつはる

大学院人間社会科学部研究科 准教授
専門分野：地域教育経営論、学校経営の実践的研究、教員研修



杉原先生の研究の中心にあるのは、学校を社会と結び直す教育実践です。目的は、子どもたちが地域や実社会と関わる中で発想力を養い、自分の力で生きていけるようになることです。そのために、地域と連携した学習や企業と協働するワークショップなどを行っておられます。

こうした取り組みに至るまでには、校長としての学校経営、教育センターでの行政実務など、さまざまな経験が重なっています。学校は一つの閉じた世界ではなく、外の社会とつながる必要があると考えておられ、地域や企業に働きかける中で、教育に前向きに関わりようとする人の多さを実感してきたと仰っていました。学校が壁をつくらなければ社会は応えてくれるという確信が、実践の土台になっているようです。

そして、杉原先生は座右の銘として「至誠一貫」を挙げられました。正直に、誠実に生きる姿勢を貫くことが、教育の根幹であるとのことでした。学校は制約の多い場所だと思われがちですが、実際には多くの可能性を持っています。最初から無理だと決めてしまうのではなく、挑戦し続けることを大切にされていて、その第一歩として、教員自身が学校の外へ出て社会と向き合うことが重要だと考えておられます。



インタビューの様子

執筆

藤井 常充

(教育実践開発コース1年)

大池 裕平

(教育実践開発コース1年)

編集後記／第15号

広島大学教職大学院ニュースレター第15号をご覧いただきありがとうございます。
今回の号では修了生インタビューを掲載しました。

先輩方のこれからの活躍を心よりお祈りしております。最後に、お忙しい中インタビューにご協力いただいた先生方、院生の皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

担当／東郷 将也
(教育実践開発コース1年)

細島 陽苗
(教育実践開発コース1年)